

複数マスターを利用するメリット&デメリット

(簡易合併先のマスターで全社マスターを管理する方法) (複数マスター利用例)

★メリット

- ・部門コードをすでに何かの用途で利用している場合、会社マスターで支店営業所などで利用が可能。
- ・合併マスターの数字把握も支店営業所等の数字把握も即可能となる。(合併マスターへ転記する作業はない)
例) 001 本社・002 名古屋支店・003 大阪支店・999 全社合併マスター の場合
合併マスターの設定画面で 001+002+003 を自動的に 999 に数字を反映させる(仕訳データのみ)
- ・合併処理や月次処理、会社選択(合併元、合併先の選定)をする必要がない。
- ・Web 一本化の為、超財務システムが無くなりオラクルへ投入といった処理もなくなる
- ・仕訳の追加修正しても、即合併マスターへ自動的に数字が反映される、合併処理自体の作業がないので処理手順を誤ることはない、
- ・Web 合併処理を選択すると自動的に合併された資料が作成できる。
仕訳データのみを足し込むので、損失と利益が両方計上されることはない。

★デメリット

- ・部門間取引を、本支店仕訳で処理するため、マスター別に入力が必要になりデータが2倍の入力になる。
それに従い仕訳伝票も2倍になる。
- ・消費税一括振替が各マスターごとに処理が必要になる。
- ・繰越利益をマスター別に修正が必要になる。(配当などの利益処分)
- ・科目枝番部門 Pro 等の登録は各マスター分行う必要がある、参照制約も同様に行う各マスター分行う。
- ・システムメンテナンス作業が発生した場合、各マスターにそれぞれ行う場合も出てくる。
- ・マスター管理は慎重に行う必要がある(科目枝番部門の追加や整備時、複数マスターがある為)